

I 今年度の研究計画について

1 研究主題について

研究主題：『わかる喜びを知り、学ぶ意欲をもつ児童生徒を育てる』
～学びを支えるICT機器の活用・遠隔教育の可能性を探る～

2 主題設定の理由

本校では、入院及び通院加療している児童生徒に対して小学校、中学校に準ずる教育を行っている。加療中の児童生徒の多くは学習空白を抱え、学習に対する焦りや不安、苦手意識や抵抗感をもって学校生活を送っている。病状に配慮し、円滑に前籍校へ復帰できるよう学習補完を行っていくこと、前籍校でのつまづきによる学習空白を補い、学習に対する苦手意識や抵抗感を和らげていくことなどの支援が必要である。児童生徒がわかる喜びや楽しさを経験して学ぶ意欲をもてるように、学校生活全般で自己肯定感を高め、自尊感情をもって集団の中で学習できるように支援することが、私たち教師に求められている。

病弱を抱える児童生徒は、学習の空白、授業時数の制約、経験の不足や偏り、身体活動の制限などのため、自主性や主体性が乏しかったり、基礎的・基本的な内容が十分に学習できていなかったりする 경우가比較的多く、従前より病弱教育の現場ではICT機器を活用する実践が各地で積み上げられてきた。また、病気のため教室に登校できない場合には、病室内で指導する教師と教室で指導する教師とが連携を取りながら、オンライン授業により病室内でも授業を受けることができるようにする「遠隔教育」の実践も上積みが図られていて、さらなる創意工夫が求められている。本校においても「入院していて、通学できない児童生徒」、「登校が不安定で、集団が苦手等で集団の授業に入ることができない児童生徒」や「入院後に自宅待機の期間を課せられている児童生徒」には、主に『学習機会の確保』や『孤独感や不安の軽減』などの観点から新型コロナウイルス感染拡大という世情も相まって「遠隔教育」の必要性が増してきている。以上、述べてきたような実態やニーズに基づいて、標記の研究主題を設定した。

研究副主題は、「学びを支えるICT機器の活用・遠隔教育の可能性を探る」とした。これは、国が計画した『GIGA (Global and Innovation Gateway for all) スクール構想』に基づく山梨県の施策に関連する。大容量の通信システムへと変換され、1人1台端末と高速通信環境が一体に整備され、ICT機器の効果的な活用による授業改善が求められているという理由が大きい。

また、○昨年度の校内研究活動の反省の中に「新年度の研究は、ICT教育を望む」声が複数あったこと、○昨年度までの2か年の県指定研究「インクルーシブ教育システムの構築に向けた『合理的配慮』実践研究事業」を通して「授業づくりと『合理的配慮』の提供に関する7つのポイント」（実践集「ふじみ」第37集 p65～p67とp69 参照）のひとつとしてICT機器の効果的な活用が確認されたこと、○山梨県教育委員会から、特別支援学校におけるICT教育推進事業に係る「ICTを活用した授業づくり実践研究校事業」（2か年研究）に指定されたこと、○昨年度のコロナ禍での動画配信の取り組みから始まり、「Web会議システム」を利用した入院生とのオンラインでの授業実施まで遠隔授業の実践が蓄積されていて、質の高まりが期待されること、などの理由から副主題に掲げた。

研究の具体的な方法は、まず、これまでの本校の「遠隔教育」による課題点と成果を整理し、そこから考えられる留意すべき点を共通確認することから研究をスタートしたい。新たなテーマであるので、じっくりと意見や情報を交換して「共通の視点」を共有しながら取り組む体制を築きたい。そして、「共通の視点」を踏まえた「一人一実践」を継続していく。昨年度の研究反省アンケートの中でも、「実践事例の提案をする側・聞く側にとって、学びの多い有意義な機会になっている」「教師が授業力をつけるには授業提案である」「授業実践者である私たちは、絶えず授業力の向上

を目指すべきである」という声が寄せられ、「一人一実践」の効用と「教師にとっては授業が命である」という熱意が伝わってきた。「一人一実践」については、実践を蓄積していき、実践を類別【どんなニーズをもつ子に、どんな場面で、どのようにかかわったら（どんな支援をしたら、どのようにICT機器を活用したら）、学びを支える観点からどんな効果があったか？ 課題点は何か？】して、最終的には、病弱支援学校としての遠隔教育のモデル化の構築につなげていきたい。

山梨県の施策により、本校にICT支援員が配置された。専門的な知識を有するICT支援員に、機器操作や端末操作の支援、トラブルが起きた際の復旧対応などの『ハード面』の支援だけではなく、わかる指導や指導につながるICT機器の効果的な活用方法などの『ソフト面』の支援を期待し、授業の質の向上に向けて共に歩んでいきたい。

「ICT機器」や「遠隔教育」などの専門用語がいくつも並び、テクニカル（技術的）な話や内容にも聞こえるが、「大切なことは、ICT機器は学習における教材・教具であり、教師は児童生徒の実態に応じて選択し、活用していくことである」、「はじめに、ICT機器があるのではなく、最も効果的なツールのひとつとして考えられるものがICT機器であれば積極的に活用していくことである」。（2020『病気の子どものための教育必携』ジアース教育新社より引用）。このことを常に意識して研究を進めていきたい。

県指定研究を活用して、個々の教師が「授業力」をみがき合い、向上させることで、研究主題にある児童生徒の姿に迫っていききたい。また、富士見支援学校のチームとしての「教育力」がより向上していくことを、今年度も目指したい。

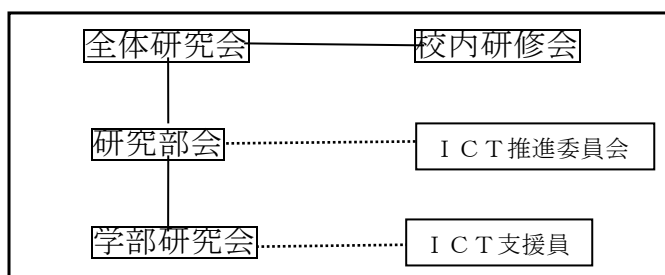
3 研究の目標

- 一人一実践と研修を通して、教師各々の授業力を向上させる。
- 本校の児童生徒個々のニーズに応じた「遠隔教育」のあり方をさぐる。

4 研究の方法

- ・本校のこれまでの「遠隔教育」の課題点と成果を整理し、そこから考えられる留意すべき点について共通確認する。
- ・一人一実践を中心に、全員で研究を進めていく。
- ・一人一実践（よりよい授業づくり）に向けて、ICT機器の効果的な活用方法について、ICT支援員と事前に検討する機会を設ける。
- ・遠隔教育に関する研修機会を通して、ICT機器の活用力【Zoom、Microsoft Teams、Face Timeなどの機能、接続方法、操作方法／デジタル教科書、書画カメラの使用法、等】を身に付ける。
- ・研究会での意見交換や共通確認や、実践の類別化を通して、本校の児童生徒個々のニーズに応じた遠隔教育における望ましい支援の方法について整理する。
- ・実践事例の提案で使用した（活用した）教材をデータベース化して蓄積する。
- ・実践、研究の経過や成果等を研究収録（実践集ふじみ第38集）としてまとめる。

5 研究の組織



◇全体研究会

- ・校内研究計画、研究報告、研究のまとめを行い、意見交換の場とし、共通理解を図る。

◇校内研修会

- ・目的別に研修会を計画し、外部から講師を招聘する等、専門性を高める研修を行う。

◇研究部会

- ・研究部の分掌会議に相当するもので、研究体制や研究計画等、研究全体に関する企画・運営
・推進・統括を行う。

◇学部研究会

- ・校内研究計画に基づいて、教諭（養護教諭含む）全員が出席して、事例内容を深め、共通理解を図る。県指定研究を推進しているので、昨年度同様に教頭先生に出席してもらう。

◇ICT推進委員会

- ・本年度立ち上げた、独立した委員会である。ICT機器管理、ICT活用推進、ICT校内研修の企画立案、情報モラル教育の推進、ICT支援員（外部専門家）との連携を行う。

6 研究計画

(1) 研究日

- ・基本的には毎月1回の研究日を設定する。行事等が重なり設定できない場合は、他の日に設定する。また、必要に応じて設定する場合もある。

(2) 研究期間

- ・令和3年（2021年）4月から令和5年（2023年）3月までの2年計画とする。

(3) 研究年間計画

- ・省略